

大通和座通信

YAMATOZA

日々新面目
其の三十四

安東伸元

近頃、恰好（格好）という言葉に引掛かっている。「恰好をつける」「恰好がつく」という言葉の意味に、囚われているのである。これまで幾度となく自省の念をこめて識者・先達の皆さんへ謝ってきた私の勝手気ままな物言いについて、その原因となる不審や憤懣などといった感情の起こってくるわけが、この言葉によって解明されるように思うのである。恰好をつけるという意味は、あるモノの様子を良しとして、とりあえずそれを真似て同じ体裁を繕う事と解釈できる。であるから「恰好をつける」という段階では、それは未だ本モノではない。明治維新以来わが国は、先進西欧諸国のたたずまいをひたすら真似て近代文化国家の恰好作りに専念腐心してきた。「学ぶ」は「まねぶ」を語源にするとわか

れる。真似をして摂り入れた知識を自家焙煎し発酵熟成させて、借り物でない自家の思想が形成される。これが学習することである。しかし私が、この様子について不審を感じると申し上げるのは、恰好をつけるために真似て体裁を整えるに必要な方策と体制だけが国のあらゆる処に張り巡らされ、表層のお祭り騒ぎが起こり、人間の思想までがこの風潮に左右されているという状況についての事である。その結果、軽佻浮薄・追従追従・猿まね・付和雷同・西高東低などなど、あまり好ましくない形容詞が、我が国の国体、政治、経済、文化、国民性を批評解説するに際して自虐的に使われてきた。使ってきた張本人は我が国を代表する知識人たちと、マス・メディアである。時たま世界中の人間から賞賛を受ける学者や研究者、また文化人や芸術家が現れると、待つてましたとばかりに国家的な報道騒ぎを繰り広げ、広く日本人の誇りと自信を喚起しようとするが、所詮それは個人的な一過性の出来事に過ぎないものだから、根柢の憂慮すべき現状はいささかも改善される気配がない。わが国に限ったことではなく、マス・メディアというものは世界中同じ性質を持つものであるかもしれないが、正論と称した警句的な言論を展開しながら、一方ではそれを簡単に覆してしまつて低俗な娯楽番組を大量に提供し続け、

この矛盾したからくりを現代経済論理上やむを得ない社会現象だと云い放つて、形振り構わず利益を追求している。この所業は、まさしく「マツチ・ポンプ」である。我が国を蔽っていた暗雲が晴れてその本体が見えてきた時、わが目を疑う現実の姿に直面した日本人の多くは、衝撃と驚きを感じるに違いないだろうと思う。かく言う私も近年いよいよ驚愕に近い衝撃を覚えている。国は恰好をつける体裁作りにのみ精を出し、生活情報を握るマス・メディアは、マツチ・ポンプを繰り返して喧噪の社会風潮を作り続けている。いつの間にか日本は、このような様相の国になってしまったのかと驚いているのである。もっとも西欧近代文化思想と出会ってから未だ一四〇年しか経っていないわけだから、国の在り様が発展途上国並みに「恰好をつける」域を出ていないのは無理からぬ事という意見もあるようである。近代文明と思想が東洋の島国を襲い、変革の嵐に見舞われた新政府は、それまでに在った芸能文化の処置に困る。芸術の芳香をふんだんに漂わせた西欧の音楽や演劇などの芸術と同列に扱うには不具合が感じられる。かと言って、大衆的民俗芸能として扱うのは勿体なくて憚られる。とりあえず西欧様式を摂り入れて恰好をつける上で当面さしたる支障の来たさぬよう、能・狂言・文楽・歌舞伎・邦楽などを一まとめに

し、「古典伝統芸能」と付箋をつけて処理した事は、驚くべき知恵であったと言える。新体制国家をつくる志士の中に、脱帽して敬礼すべき知恵者の策士がいたようである。やがて明治・大正を経て、日本人の意識の中に芸術思想が急速に芽生える。これまで遊芸の、或いは芸事という風体の衣を着せられていた古典伝統芸能にもこの時、芸術思潮の冠水洗礼を施して近代思想との折り合いをつけるべきであったものが、付箋を付けて仕舞い込まれた時のまま一世紀半に近い年月放置されて今日に至っている事に不審を禁じえないのである。この例に等しく、恰好をつけただけで芯も基盤も構築しない事例が至る所に見られ、今日其処から腐臭が立ち昇り醜態が噴出しているのである。官僚機構から雲霞のように湧いてくる不祥事、政治の貧困と混乱、うたかたの浮草が如き芸能文化、教育の荒廃、商業行為における信じ難い道徳観念の欠如、あらゆる現場において、効率化が最新の英知であると推奨する欺瞞などは、すべて上辺だけを繕う「格好つけ体制」からもたらされたものである。私は何も絵に描いたような正義論や定義定説を振りかざす積りは無いが、物事の真理と対峙し、あえて難解なものにも向き合おうとする人間を馬鹿扱いするような社会は明らかによろしくないと思う。雑字をひけらかして、あたか

もそれが教養であるかのように思わせたり、ボタンを押すスピードを競わせたりするクイズ番組は、底の浅い効率信奉人間を育て、これが教育の荒廃に繋がっている。日常的に聞こえてくる言葉が、幼少年期の人間に重要かつ決定的な影響を与えと言われる。そして今、この根幹のところを危ぶまれている。西洋音楽を研究している教員や生徒の中で、何の疑いもなく西洋音楽が他の音楽に比べて優れていると言いつける人がいる。明らかにそこに人間を育てる芸術的勉強の匂いを感じて、その人たちは胸を張って洋楽を讃美するのだらうと思う。文化の基は言葉である。人間はその言葉を自らの国、又は民族が培った古典から嗅ぎ取り、汲み摂るのである。世界中の人間は、みなその様にして自分を知り他人を知って住み分けているわけである。武智鉄二氏の名言に次のような一文がある。《何でもなくやれることを、何でもなくやれないようにして、その、何でもなくやれないところから、何でもなくやれるところをつかむ・・・と、いうところが、古典伝統芸能の根本です》簡単には解らない判じ物のような文章である。我が国の古典芸能は、何やら怪しげな衣装を身にまとって、伏魔殿の奥に潜むような生業でしか、これまで生き残って来れなかったという歴史がある。この複雑怪奇な難解さに芸術的意味を添付して古典

伝統芸能を讃美するために、武智鉄二氏がこの文章をお書きになったとは更々思えない。我が国の古典伝統芸能文化を、このような妖怪染みた様子のものに仕立て上げたのは、他でもないこの国の古典文化行政である。氏はその事を多分に揶揄批判して、この一文を遣されたものと私は思っている。西洋の古典に匂う勉強の香りが、我が国の古典伝統芸能にも内蔵されていないはずは、決してないのである。明日三日、金久・原・私の三名は、午後五時過ぎ関空を飛び立つてハワイのホノルル港へ行き、クルーズ客船「パシフィック・ビイナス号」に乗船する。この船は今年四月に日本を出港して世界一周の航海を続け、三日に最終の寄港地ホノルルに着いたものである。四日に出港して十三日横浜港に入港するまでの航海中に、二夜狂言公演をし、後もう一日午前中の狂言演習講義をすることになっている。洋上船内での狂言がどのように受け入れられるのか興味津々で出かけてこようと思う。(七月二日)

註：「マッチ・ポンプ」(和製語。マッチで火を付ける一方、ポンプで消火する意)意図的に自分自身で問題を起こしておいて自分でもみ消すこと。また、そうして不当な利益を得る人。1966年の政界の不正事件で広まる。(広辞苑)



狂言を読む 伊文字」

山田師久

中学生の間で、「コクる」という言葉がはやってる。女子が男子にコクリ、男子が女子にコクる。すなわち、「あなたが好きだと告白すること」を「コクる」というのだ。これはけっして「恋心を打ち明ける」というような情緒的なものではない。またこれは思春期の一時期にまるで流行病（はやりやまい）のように蔓延する。また、その過程で楽しんでるのは当人たちよりも、彼らを取り巻く生徒たちだ。いつ誰がどこでコクるかを噂しあい、もしくは強引にその場を設定し、みんなの前で告白させて楽しむ。そして告白が受け入れられればみんなで祝福し、拒否されると慰めてあげる。

梅雨の一時期、劇場型告白ごっこがあちこちで繰り広げられる。その格好の機会が宿泊研修である。宿泊研修でコクリ、好きな人と一緒に過ごすことがあがれであり、それをみんなで見るのが楽しみになっている。

今年の夏も信州で宿泊研修が行われた。引率者のひとりである生活指導主任は、毎年恒例行事のように告白ごっこをすること

を苦々しく思い、今年こそは阻止しようと考えていた。そこで、女子生徒の部屋がある四階から、男子生徒の部屋がある三階に通じる非常口の前で待機していた。そこへちようど、見張られているとも知らぬ女子生徒が一人、「A君が三階で待つてるから、私が見てきてあげるわ」と非常階段を降りてきて、三階の扉を開いたところであつた。

この話を聞いてふと『伊勢物語』を思い出した。「むかし男ありけり。ひむがしの五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなるところなれば、門よりもえ入らで、わらわの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に夜ごとに人をすゑて、まもらせければ、いけどもえ逢はでかへりにけり。さてよめる。人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝ななむ」と詠めりければ、いといたう心やみにけり。あるじゆるしてけり。「男が東五条に住む女の元にひそかに通つてきていた。事情があつて正面から通うことはできず、土塀の崩れたところから忍んで来た。するとそれに気づいた主人が、その土塀の崩れの付近に毎夜番人を付け、女の元に行けなくしてしまった。そこで男は「関守が眠ってくれたらいいのに」という歌を詠み、それを聞いた主人は、男

安東 伸元（あんどうのぶもと）
一九三五年生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財（能楽）保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

が女の元に来ることを許してくれたのであった。学校の関守は、情け容赦のない関守であったが、この関守をおいた主人は情けの解する人物であった。また、この時代通ってくるのは男であり、ここでの男は在原業平であると考えられる。この業平が恋をした人は様々あったが、その中に斎宮もいた。『続千載和歌集』に次のような詞書きの歌が収められている。「業平朝臣伊勢へ下り侍りける時、斎宮に侍りける女房の許より」とあり、「千早ぶる神の忌垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」とあり、業平朝臣の返しは「恋しくば来ても見よかし千早ぶる神の諫むる道ならなく」とある。伊勢の斎宮が、「大宮人に逢いたい」という歌を詠んだところ、業平は「恋しいなら私のところに来てごらん」という返歌を詠んだ。

さて、この返歌によく似た歌を詠む「伊文字」という狂言がある。この狂言の梗概は次の通りだ。独身の主人がある日、妻が欲しくなり、清水の観世音に妻乞いの祈誓に出かける。清水の観世音の前で通夜をしていると、靈験あらたかにも観世音が夢に現れお告げがあった。すなわち、「西門の一の階に立った女を汝の妻にせよ」というお告げであった。そのお告げに従い西門へ行ってみると、案の定妙齡の女性が立っている。主人は太郎に命じ、女性がどこの人かと尋ねさせる。すると女性は「恋しくば、問うても来たれ 伊勢の国 伊勢寺もとに住むぞわらわは」という歌を詠んで、いずこともなく立ち去る。あまり突然のことで動転した太郎と主人はその歌の一部しか覚えていない。すなわち「恋しくば問うても来たれ、い」までしか覚えていない。それではせつかく清水の観世音に授かった妻も探しようがない。そこで関所を設け、通りかかった人に歌の続きを思い出させようというとんでもない事を思いつく。関所には早速、急用で通りかかった人が捕まり、その人とさまざまな問答をする。結果、肝心の「い」から始まる国の名を「伊勢の国」、また「い」の字から始まる里の名を「伊勢寺」と思い出す。最後は祝言の謡い留めとなる。

この狂言から読み取れる面白さは、次の二点である。まず一点目は、男が妻乞いの祈誓に清水寺に出かけて、靈験あらたかにも観世音のお告げがあり、そのお告げ通り女性が手に入るといふ筋である。平安末期から江戸時代初期まで、この説話の形は清水観音靈験譚といえるパターン化されたものである。それがもつとも盛んに伝えられたのは中世であった。このことは『今昔物語集』を始めとするさまざまな説話集や『御伽草子』にも散見することから伺えることだ。たとえば『今昔物語集』巻十六には清水観音の靈験譚が多く収録されている。第三十三話には京の貧女が清水観音のお告げで八坂の塔に住む盗賊と契り、盗賊からもらったという話があり、また第三十四話には、身寄りのない若い僧が清水観音の計らいで若い女と結ばれ、豊かな身となった話がある。『御伽草子』の中の「ものぐさ太郎」は妻乞いのために清水寺の参詣道で大手を広げ、辻取りをする。彼につかまった女房は教養のある人物で、謎かけで言い逃れ、ものぐさ太郎が考えている隙に逃げようとたくらんだ。しかし、ものぐさ太郎の教養が彼女を上回った。「今はこれにては、人目もしげし、わらわが候ふ所へ、とうて入らせ給へ」と謎をかける。「わらわが候ふ所をば、松のもとといふ所にて候ふ」ものぐさ太郎、これを聞き「松のもととは心得たり、明石の浦のこと」と簡単に謎を解く。次々と同様のなぞを言いかけるがことごとく、答えられてしまう。ついに歌のやりとりとなり、「思ふならとひても来ませわが宿は唐橋の紫の門」と歌いかけ、これを思案しているうちに逃げ帰ったのであった。

面白さの二点目は歌の教養である。三十一文字の短歌は室町人の教養であった。王朝人へのあこがれであり、有徳人としての素養であった。そのおかげで、ものぐさ太

郎も出世することができたのである。

ところで、狂言「伊文字」に登場する女性が詠んだ「恋しくば問うても来たれ伊勢の国伊勢寺もとに住むぞわらわは」の歌はこの狂言のために作られたものか、それとも、すでにあつた有名な歌を利用したものかという疑問がある。伊勢寺は現在の三重県松阪市伊勢寺町のことである。ここにある国分寺は戦国時代に焼かれてしまったが、江戸時代に再建されている。そこには昭和十二年に建立された石碑があり、「恋しくば尋ねてぞみよ伊勢の国伊勢寺もとにすめるわらわを」と彫られており、この歌は光明皇后の歌とされている。(これは実際に確認していないので後日確認してみる。)

また、江戸時代の雑書『勢陽雜記』には伊勢寺跡に「恋しくば尋ねて来ませ伊勢の国伊勢寺もとに住むぞわびしき」の歌碑があると、新古典文学大系の『狂言記』の脚注にある。「住めるわらわ」と「住むぞわびしき」とでは意味が異なる。「住めるわらわ」と、すると、伊勢寺に住む私を訪ねて来てほしいというメッセージが込められていることになる。しかし、「住むぞわびしき」はわびしさをまぎらわすため、誰か来てくださいというメッセージとなる。作者が光明皇后ならばどちらがふさわしいか、といえは光明皇后にまつわる恋の伝説がこの歌とともにあるのなら、「住めるわらわ」の

方である。そうならば狂言作者がすでにあつた歌を利用したといえるが、案外狂言を見た人がこの伝説を作ったということも考えられる。

いずれにしても、現代人は気持ちを「コク」という短絡的手段で伝えている。しかし昔の人は恋の成就を神仏に祈つて不思議を体験したり、和歌を交換したりした。恋の成就には複雑な手続きがあり、困難がある。それを乗り越えてこそ深い愛情が生まれ、幸せを感じる。そして私たちはその過程に文学の面白さを感じるのである。了



山田 師久(やまだ もろひさ)

一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレン。月例輪読会の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

落語の眼差し

「今日びの若いもんは」

森五六九

「今日びの若いもんは・・・」今も昔も変わらないこの言い回し。私の世代より新人類という言葉が流行りだし学生時代には絶えずこの言葉を聞かされ、その度「では一体大人はどうなのか？」などと訝しげに感じたものである。その生意気な思考回路は今も基本的に何ら変わっていない。でもいつしか私もオッサンと呼ばれる部類に入り、つい「今どきの若いもんは・・・」と呟くようになった。しかしこの言葉は不用意に使うものではないとこの頃つとに反省しきりである。今、メディアから流れてくるのは食品会社の偽装と言い訳、居酒屋タクシー、猥褻教師・・・いい年をした大人が一体何をやっているんだキャンペーン。事実、町を歩いていてもマナーが悪いのは何も若者だけに限った事ではない。電車に乗って大股を広げて座る若者もいるだろうが、その傍らには他の乗客が立っているにも関わらず買物袋で席を占領しているご婦人もいる。車中酔っ払って絡みだすのは明らかに年配者の確率が高い。「言葉遣い

を知らない」「マナーを知らない」・・・それは老若男女問わず。ただ若者の場合、それを教わる機会やその環境にないことからくる事もあるだろうし、一方的に責めつけるだけに終わるのはあまりに理不尽だと思うのである。社会的影響力の強いメディアの中にその責任を感じて仕事をしている人が何人いるだろうか。若者が流行に乗せられたタレントの真似をするのは至極当然のことである。今の大人社会には希望が見えず、親だつてまともだとはいえない。かくいう私も高校生の父親だがとても見せられた背中ではない。ゆえにただ一方的にステレオタイプにこの言葉をぶつけるのだけはやめようと思つてゐる。「今日びの若いもん」という台詞を聞く度若者はきつと訝しげに感じてゐるに違いない。そう、あの時の私のように・・・

今、私が出講する俳優スクールでの「落語」の授業では学んだこと感じたことなどを毎回用紙に記入して提出してもらつてゐる。これが私にとって授業の成果を知る何よりの道標。理解してゐるだろうとこちらが思つてゐても実はそうでもなかったという事が多々ある。授業の内容は落語を題材にした台詞術が中心だが時折愚痴ともつかぬ私の放談タイムで時間を費やす時もある。師匠との思い出話や仕事でのトラブル・・・しくじりの多い私はこんな話題には事欠か

ない。そんな中、意外に反響が大きかつたのが言葉遣いやマナーに関する問題。私自身右も左も分らない世間知らずのただの兄ちゃんからの入門である。上も下も知らなければ口の利き方も分らない。タクシーや料理屋、楽屋における座席の上下や立ち振る舞い、エレベーターの乗り方、口の利き方、電話の採り継ぎ、手の組み方、嘘のつき方、喧嘩の仕方、お客へのヨイショ・・・それら全てが彼らにとつて「へえ、そうなんだ」の連続だつたらしく「そういう事もつと教えて欲しい」という用紙への記入がかなり見られた。つまり、今どきの若いもんはそういう当たり前を教えてくれる人や叱つてくれる人が廻りに誰もいないのである。学校ではそんな事を教えてくれないし教えられる人もいない。今や家庭でもそうだろう。それでもつて「今日びの若いもんは・・・」と一方的に非難するのもどうかと思う。ずいぶん前に「今は当たり前のことが当たり前でできて、それが武器になる世の中や」と言われたことがある。生徒たちには人生の師とすべき「自分が尊敬しなおかつとも怖い存在」のできるだけ側につきなさいという事を常々言つてゐる。あわよくば先生と生徒ではなく師弟であつて欲しい。私にとつては故春蝶・三代目春団治・二代目春団治夫人・安東伸元・・・こんな私がどうか愚れずにこれたのはこ

の師匠方のおかげである。ただ、今の生徒たちにとつてそういう存在に出会うことがまず一番の難関なのかも知れない。

ところで今年の四月より私は箕面にある大阪青山大学の中に新設された健康こども学科の客員教授という職に就くことになつた。ここを巣立つ若者は将来主に幼児教育の現場につく若者だ。さしあつて私の授業が始動するのは秋からだ。「日本語」という講義の中で行う予定。現在、その準備中だが「落語を通じて語る人間学」のようなものを展開しようかと思つてゐる。落語は狂言同様どこにでもいるごくフツツの人々が登場する。また、泥棒にせよおつちよこちよいで憎めない人間として描かれてゐるのが落語の世界。子供に対しては常に暖かい視線である意味古典落語に描かれる世界は理想的な社会である。そこから人間をどう見るかというのが主題。先日も学科設立記念にあたり「落語の眼差し」というテーマで一時間ほど講演をしてきた。「今どきの若い者は・・・捨てたものじゃない」これが私の主張とするところ。本音を言えば私の中で実際にそうだと思つてゐる部分とそう思いこもつとしてゐる部分とがあるのだが、少なくとも「今どきの若い者は仕方がない」と思つて教壇に立つようでは教師は成り立たない。「何とかしよう」と思つてから教壇に立つのであつて見捨ててな

壇に上がるのはまるでブラックユーモアである。

さて、ここに「明簪丁稚」という咄がある。商家の旦那が濁った井戸水を澄ませるために丁稚に薬屋まで明簪を買いに使いにやらせたところ、丁稚は過って「コンバンおくれ」。当然ながら明簪など買えるはずもなく、それを旦那に報告をすると旦那が「私の言うたのは今晚と違う、明簪じゃ」。

すると丁稚が「一晩違いで売ってくれなんだ」。五分足らずの他愛もないこの小品を私はよくワークシヨップなどで引用している。途中で、丁稚が旦那をからかうシーンや、水と湯と間違つて鉢の中の金魚を殺してしまうといった件が出てくるが、ここでの旦那は叱りはするものの決して本気で丁稚を怒ることはない。あくまで丁稚に対して「しゃあないやつちゃ」けど「可愛いやつちゃ」である。また、丁稚は子供なのでできるだけ屈託なく可愛らしく罪のないところで演じるようにしている。また、丁稚を可愛らしく見せるには丁稚だけを一生懸命にそう演じたとして全く不足である。肝心なのは旦那の丁稚に対する眼差しやモノ言い。それによって丁稚がどんな子供かを観客が推し量る。すなわち丁稚に対する旦那の目はすなわち観客の目でもある。また、旦那が丁稚に対し優しい眼差しを送れば丁稚もおのずとその咄の世界でそう振舞うようになる

から不思議である。丁稚を憎めない可愛らしい存在に描くのは何も丁稚の演技だけに限らずそれを取り囲む環境の演じ方の役割が大きいという事。これは狂言においても同じようなことが言えそうだ。主従関係にありながら主人をからかう太郎冠者にそれをたしなめながらも最終的にはそれを許しているであろう主人との何ともおらかな関係は落語も同じである。

・ ・ ・ 人は環境に対する適応能力を持ち備えていて、その対人関係によって自分の姿を変えていく。「可愛い」と言われ続けられた子供はそれなりにその立ち位置に就くものである。女性とて愛されてこそなお魅力的に映る。同様に「今どきの若いもんは・・・仕方がない」ではなく「捨てたもんじゃない」とすれば彼らだつていつか期待に応えてくれるだろう。それを「仕方がない」とあしらえば彼らとて拗ねて当然。よく「自分の顔は相手に映る」などと言うが、子供には利害関係がない分反応は素直である。暖かい眼差しは熱い眼差しで返し、煙たい眼差しは白けた眼差しで返してくる。こちらが口をとんがらせて喋れば聞き手の顔も無然となつてくる道理。肩で喋るようなヒステリックな物言いは決していい結果を生まない道理。腹で伝えてこそ腹で理解してくれる道理。・ ・ ・ 「人は、教育は、相互の関係で成り立つ」今更こんな当たり前を

私は落語と狂言に教えられた。

2008・7・4



森五六九（もり ごろく）

大阪芸術大学を中退して故桂春蝶の門弟となり落語家桂蝶六として活躍する一方、大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪アニメーションスクール、大阪シナリオ学校等の非常勤講師の他、ECCアーティストカレッジ落語教室の主任講師や府立桃谷高等学校定時制昼間部・夜間部の特別非常勤講師を勤め、「高座」のみならず、「講座」の展開も広がっている。今年四月、大阪青山大学客員教授に任命される。

兆紀探求

小田兆紀

体は自分が思っているほど動かないものです。常に意識して理想を思い描き、それに近付けるように訓練していかないといいけません。しかし、自分を客観視できないと自分はやっていているつもりでも実際はできてない上にやっていているようにもみえなかったりします。

「いける！」と違って久しぶりに全力ダッシュをした時、気ばかり先に走って体が全然追いついていかない：：気持ちと体が分離した状態、それに似ています。「きちん」とやらねば！」という気持ちの方が先行し過ぎて変に意気込んでしまうと、こうあらねばならないという固定観念に陥ってしまいかう廻りをしてしまいます。

気構えたり必要以上に重く考えたりしないで無心に取り組んだ方が良いという事はよくある事です。妙な作為を入れずに無心でやった方が評価が良かったりするのには、無駄な力が入らず自然に流れるように見せる事が出来るからでしょう。まずは、理屈抜きでとにかく「やるんだ！」と思って飛び込み体にどんどん入れていく方がよいという事です。そしてその次の段階では、体に蓄積された事をきちんと整理し、自分自

身が意識して表現できるようにしていかなければなりません。

他人が模索している過程を参考にすることも勉強になります。違った観点で見る事が出来ますし何より自分がやる時よりも冷静に客観的に観る事が出来るからです。人の稽古を見て気づいた事をいざ自分の番の時上手くフィードバックできないまま終わってしまふ事も多々ありますが、しかし、「客観的に観る」という作業は、自分が稽古をつけてもらっている時よりも多くのものを得る事ができます。

そして最後は「全体を観る」という事です。一点だけを凝視するという事は、要らぬところに力が入ってしまい、本当に観てほしい部分や見なければならぬ部分を見落としてしまいます。結局どれだけ冷静に客観視出来るか、大事なポイントを観察する眼を養えるかという事に尽きる気がします。

理想を思い描き、理想像をよく観察する。理想と現実、心と体の差を埋める作業、その理想に近づく事の出来る肉体を手に入れる努力をする、当たり前的事なのかも知れませんが、これがどの分野にでも通じる基本概念かも知れません。



小田兆紀（おだ ちようき）
大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。二 三年イラン海外公演に参加、この経験は演劇を指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二 三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめる。

物言うからだ6

金久蒼汲

学生のころ、演技指導の授業で「役者は舞台上で泣いてはならない」と習いました。辛く悲しい場面であればあるほど、目に涙は溜めても、それを一滴たりともこぼしてはならないと教わりました。感情が高ぶって泣くというのは人間のごく自然な反応です。しかし「悲しい」泣く」とは限りません。人間の、それも私たち日本人の感情はもつと複雑です。私たちは、悲しいからこそ泣くまいと気丈になったり、また悲しすぎて涙すら出なくなったり、時には悲しいを遙かに通り越して笑ってしまったたりするものです。観客は悲しくて泣く役者が観たいのではなく、泣くまいと必死に堪える葛藤や心の揺れを観たいものなのです。役者が感情を解放して涙をこぼした瞬間、観客の心は舞台から遠ざかってしまうのです。

芥川龍之介の「手巾」の一場面。息子・憲一郎の恩師に、亡き息子の追懐を淡々と語る母親の心情が綴られています。自分の息子の死を、眼に涙を浮かべるでもなく、声が上ずるでもなく、口角に微笑みさえ浮かべながら語る母親を不思議に思う恩師だったが、ふとその母親の膝へ眼をやると、そこには亡き息子を想う母親の内に秘めた情

念が渦巻いていたのです。以下引用。「その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾（はんけち）を持った手が、のっている。勿論これだけでは、発見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるえているのに気がついた。ふるえながら、それが感情の激動を強いて押さえようとするせいか、膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握っているのに気がついた。そうして、最後に、皺くちやになった絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれているように、繻（ぬいとり）のある縁（ふち）を動かしているのに気がついた。婦人は、顔でこそ笑っていたが、実はさつきから、全身で泣いていたのである。」心に湧き上がる感情を、余すところなく発散させるような西欧の表現とは異なり、感情を内に秘めて秘めて、それでも堪えきれなくなつたものが情念となつて表出されてくるところに、私たち日本人は共感し、心を揺り動かされるように思うのです。能楽が、世界に誇る日本の古典演劇として現存している理由は、こうした日本人特有とも言える普遍的な精神性が、色濃く、無駄なく内蔵されているからであると思います。きつとこの母親も手巾を握り締めながら、鬼女になるまいと必死に堪えていたのではないのでしょうか。週に一・二回、バレエ

教室に通っています。その教室に通う後輩の誘いで、年末に催される発表会に出演するためです。役者の嗜みとして一応数年前まで違うスタジオに通っていたのですが、所詮は素人の悪あがき。身体の使い方や表現の仕方も分からないまま、いつの間にかレッスンから遠ざかってしまっていました。しかし、今回ばかりはそうはいきません。舞台上に立つ以上、心と身体を周到に準備して、その舞台の目的と本質を明確に見極めなければなりません。先入観で固定してしまえば心と、一向に言うことを聞いてくれない身体にムチを打って、日々レッスンに励んでいます。筋肉の使い方や意識の持ち方、パートナーとの間合いや呼吸など、教えてくださる先生は、いつも丁寧に指導してくださいます。先生はまだ二十代前半とは言え、若いながらに成熟した考えと精神的な強さを持ち、後進の育成に余念がありません。指導中の「良いですよ」が口癖で、私たちの良いところをいつも引き出してくださいます。バレエの世界にも師弟の関係があつて、先生はその恩恵を存分に受けられ、師匠亡き後、教室を引き継がれたのだそうです。私も文化センターやこども教室や学校などで狂言を教える機会が増えてきたこともあり、先生とはよく指導することの難しさについて話をすることがあります。様々な課題が見つかる中で、結論は、

大切なのは決して技術ではなく、教える側の人格次第というところに行き着くのが常なのですが、ある日先生は「私が教室を継いでバレエを教えているのは、先代への償いです。」と教えてくれました。まだ十代のころ、バレエへの情熱を失いかけていた先生は、先代の想いを理解しきれず、ある時バレエも先代も裏切ってしまったそうです。それまで何があっても決して怒ることをしなかつた先代は、最後の最後にたった一度だけ先生をつねって、そのまま亡くなられたのだそうです。若さゆえの過ちを謝ることすらできなかった先生は、おそらく自責の念を抱え、想いも新たに一大決心をして教室を継がれたのでしょう。笑いながらそんな話をしてくださる先生の奥底には、どれほどの情念が渦巻いていたのか分かりません。指導する立場になって数年、少しずつ、でも着実に先代の想いを汲み取ってこられたのだと思います。私は先代のごことは存じ上げませんが、先生のレッスンを受けていると先代のお人柄が窺えるようで、なんだか嬉しくなります。単に技術や仕組みを説明してくれるだけの多くの教室とは異なり、指導者の人格に裏打ちされた感性や思想を、ありのまま感じさせてくれる場所に出会えることは、とても貴重でありがたいことです。私は先生から、本当に多くのことを学ばせていただいています。年末の

発表会を無事終えた時、先生のいつもの「良いですよ」が聞けるよう、あと数ヶ月、心と身体を修練したいと思います。



金久蒼汲（かねひさそうきゅう）
大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。イラン公演、インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

「易しさとその弊害」

原 斗轟

現在の音楽シーンはまるで毎週新曲が発表されているかのように多種多様です。ラジオやテレビの音楽番組で流されている歌の歌詞には「勇気」「愛」「純愛」「力」など、解かりやすく耳あたりの良い言葉がふんだんに使われ、歌詞の意味や物語を容易に理解することが出来ます。それらの歌詞には人間関係の葛藤や恋愛など身近な事柄が多いです。

誰しもが経験しているであろう事柄をテンポの良いメロディーに乗せる、最近の流行りの傾向は「解かりやすく、ノリが良い」ということのようにです。音楽以外でもこの様な傾向は見られます。私が大学生の頃、アナウンサーを目指す友人に、役者とアナウンサーの違いについて聞くと、ニュース番組などの報道番組は起こった事実をありのままに伝えるのが使命だから、アナウンサーは役者のように感情を込めて読むこととはせずに、起こった事をストレートに伝える事だと言いました。しかし今のニュース番組はコメンテーターの過剰な発言など、出来事を解かりやすく説明するためとはい

え、二ユースのバラエティー番組化が進んでいます。

このように「解りやすい」という事は、「自分で考えなくても解かる」という事で、それはやがて自分自身では「考えない」「判断しない」という風に発展していくのではないかと心配になります。人気のコメントーターが「この事件は が悪い！××は何をやっているのだ！」と言えば、鵜呑みにしてその通りだと思ってしまうかも知れません。誰もが知るご意見番のようなコメントーターの発言などを聞くと、自分もそのように考えていたかのように物事を判断してしまうかも知れません。自分自身で判断が難しくなれば当然他の何かにその判断を求め始めます。そして借り物の判断に、物事を自分の都合にいいように考える現代人の身勝手な要素が加わると物事は更に湾曲されていきます。

モンスターペアレンツ問題もこの延長線ではないかと思えます。新聞での報道を読むと、信じがたく理解に苦しむ親達の行動が書いてありました。一つ挙げると、教師が、ピアスをしてきた児童に外すよう注意したところ、父親が「他の子供に迷惑をかけているわけでない。自分がやることは最後までやり通させるのが、こっちのポリシーや」と強硬に反論してきた（産経新聞より抜粋）とありました。モンスターペアレン

ツの事について中学校教諭をしている友人に話を聞くと良識のある親も勿論大勢いるが、一部では確かにそのような親は存在するし、年々増えていると付け加えました。モンスターペアレンツ問題の原因に関しては世代的な原因や過剰な消費者意識の拡大、少子化その他戦後民主主義教育など研究者の意見は様々であるといえます。複雑な要素が絡み合っただけの問題ですが、その要素の中には解かりやすさ易しさから来る弊害があると思います。

モンスターペアレンツ問題を例に取り上げましたが、同じような事は様々な現場、様々な世代で起こっています。これ等の問題の原因を生まれた世代や受けてきた教育、取り巻く環境に押し付けるのではなく、今自分の目の前にある問題をどのように思いつくのか、どのように感じ、どのような判断を下すかが重要なのであると思います。

私達を取り巻く環境・社会はより解かりやすく、より簡単に変わっていきます。これらの解かりやすさ、易しさの弊害の中でしっかりと自分の考えと判断を持つことは容易な事ではありませんが、気付いた時点で始めなければなりません。今自分が感じている事は何なのか、そして自分が下そうとしている判断は誰のものか、探る必要があります。



原斗轟（はら とうこう）
福岡県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東伸元の薫陶を受け、卒業後安東伸元に師事。古典の力を体内に埋め込み、現代演劇の様々な分野で生かすべく自身を鍛えている。
二〇〇七年八月『兵士の物語』に於いて兵士役を勤める。

意志ある静寂

久保朋子

暑い夏が来る前にジメジメとした梅雨を越さなければなりません。私は梅雨の終わりに風邪をひき発熱しました。夜、眠りはじめると体温はどんどん上昇します。全身から汗が吹き出し夜中に何度も目が覚める。水分を補給して着替え、苦しいけれどもまた眠る。睡眠すると同時に私の細胞と風邪のウィルスが戦火をあげて闘いはじめる。朝、目を覚ますと熱は少し下がっているが、身体中が疲労している。勝利は私の細胞。回復に近づいていると思うと嬉しくなる。眠っている間に私の身体の内側で、こんなに激しい活動をしていることに感動しました。

さて、能・狂言の面というものはとても静かです。壁に掛かっていたり、そこに置いてある面は、何も言わず何も見つめずただじっとしています。しかし、演者が面をつけると表情豊かに語りはじめます。こちらを向いて近づいてくると、キツと睨まれ金縛りにかかったみたい動けなくなりまします。面自体は静かな筈なのに、その内側から強い光を放っているのか目が離せません。私は目で面を見ると同時に、頭の中でその

表情を想像し始めます。微笑、怒り、哀しみ、恨み。面がうつむき、表情に陰ができません。あ、泣いているのだなと認識し、心が揺れ悲しみが伝わる。面の持つ静けさは、観客が想像する隙間を与えてくれます。そして、面の表情が深く心に響くのは、人間の心の奥底に持つ静寂と共鳴するからだと思えます。

今という時代の産物は「動」です。躍動、揺らぎ、混沌。動きの美しさやキレのよい動き、とどまることの無い肉体を魅せるダンス。風の中を走り抜けるようなスピード感と躍動感、その瞬間を切り取った広告写真。プレスする隙間なく、速いリズムを刻み続ける音楽。想像・思考する必要のない使い捨ての既製品。あらゆるものが変動を続ける現代を象徴しています。立ち止まってみつめ直すのを恐れているかのようで、移り変わりの速度はめまぐるしい。ぼんやりしていたら目を回して倒れてしまいそうです。周りが揺らいでいるからこそ、自分の心の軸を鍛えなければなりません。それは影響されまいと周りを遮断し、保守的になつたり、ノスタルジーに浸ることではありません。現代の真ん中に立ち、自身をさします。今、自分の周りで起こっている現状を見つめます。次に自分自身をじつと見つめる。そして、それぞれと向かい合い、考える。これは静かな静かな作業です。

舞台を観賞しようと劇場に向かいます。いよいよ幕が開くという時、なぜ客席の照明は落ち、隣の席の友人とおしゃべりをやめるのでしょうか。観客は、役者の表情やダンサーの動き、舞台の光をはつきり見たいからです。声や台詞、音楽やハーモニ、舞台の音をしっかりと聴きたいからです。観るために暗く、聴くために黙るのです。暗闇の中で光が、静寂の中で音が生まれます。反対に、舞台の上に立つ側には、強い意志が必要です。舞台から見ると客席に広がる漆黒の闇は恐ろしく、沈黙はあまりにも静かです。そこで飲まれてしまっただけではありません。静寂の闇夜の中で、キツと目をあけて足を踏ん張り対峙する、立つ。闇の中で目を閉じ、沈黙の中おしだまるのは簡単です。しかし舞台上立つ以上、意志を持って自分の身体をさらさなければなりません。自分の居場所はどこだ！と静かに叫ぶのです。それは積極的な静寂です。

人間であり表現者であれば、時にとどまることを強いられます。いつも全力で前へ突き進んでゆきたいのに、立ち止まってしまうのは、意識の下にある強く静かな意志が働くからです。疲労が蓄積すると体調を崩し休息を強いられるのは、身体が意志を持ちストライキを起こすからです。周りからは完全に停止しているように見えます。しかし身体の内側では真っ赤な血が流れ続

けています。無意識のうちに侵入してきた現代のウィルスと闘う。自己矛盾を感じ、己をたたきつけ、孤独に打ちひしがれる。闇と対面し、自身と闘う。このような闘いは、自分の内側で燃えているマグマの温度を上昇させます。そのために、とどまることを選択します。決して八方ふさがりになつて動けなくなることはありません。発言するのが怖く沈黙に逃げるでもありません。それは意志を持った静寂です。身体は軸も心の軸もいつの間にか自ずと出来るのではなく、静かに自身を見つめ、探し、修練を続けることで自ら鍛えてゆくものです。強靱な魂を持つために、私はとどまらなければなりません。そして、この静寂が私を鍛えているのだと、強く信じています。



久保朋子(くぼ ともこ)
大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。モダンバレエ・ダンスを勉強中。身体的な観点より、小舞に興味を持つ。去年より安東伸元のもと、日本の古典・人間の本质を学ぶ。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

八月

二十四日【日】『聖林寺地藏会式の宵の宴』

開演：午後七時

場所：聖林寺 庫裡

狂言：「清水」

「千鳥」

講話と演習：「古典の楽しみ方」

入場：二〇〇〇円(当日：二五〇〇円)

お問い合わせ：聖林寺(奈良県桜井市下六九二)

TEL：〇七四四四三〇〇〇五

FAX：〇七四四四三九五〇五

九月

二日【火】

能・狂言を100%楽しむための講座 その8

『能・狂言さいしよの一歩』

開演：午後六時三〇分

場所：姫路キャスパホール

講師：安東伸元・成田達志

受講料：無料(要申し込み)定員三名

お問い合わせ：姫路キャスパホール

TEL：〇七九三三八四五八〇六

二日【火】

『四回 蝶第六の会』

開場：午後六時・開演：午後六時四十分

場所：天満天神繁昌亭〇六六三五二四八七四

演目：落語

・狂言「口真似」

・歌唱

入場：未就学児入場不可

前売り 二〇 円

当日 二五 円

小・中学生 一五 円

身障者・高校生・大学生

一八 円

前売り：チケットぴあ・ファミリマート・

サークルK・サンクス・賑わいや・

天満・天神繁昌亭

お問い合わせ：賑わいや

〇六六一六七・五二五

十四日【日】料亭『つる井』お座敷文化サロン

時間：正午～三時

場所：料亭「つる井」

料金：お食事と鑑賞(二席：一〇、〇〇〇円)

「ラポールション」：「チエロと能の舞」

演習：「仮面を観る」

講座：「日本語の復権」

お問い合わせ：料亭 つる井 中央区心斎橋2-7-25

TEL：〇六六二一・一〇一九

FAX：〇六六二一・一六六六

e-mail：t.sawai@ivory.plala.or.jp

十五日【祝】『浦田定期能』

開演：午前十一時

場 所：京都歡世会館

能：『巻絹』山崎芙紗子・山崎浩之ほか

能：『野宮』深野新次郎・福王和幸・安東伸元ほか

狂言：『柿山伏』茂山忠三郎ほか

能：『通小町』西原徹吉・原大

入 場：一般三五 円、学生二〇〇〇円

お問い合わせ：京都歡世会館

TEL：〇七五-七七一六一四

十月

十五日【水】 開演：午後二時

A&Hホールシリーズ公演 その五十五

『笑劇の古典力』

『中世の女二題』

狂言『岡太夫』

狂言『鏡 男』

歌唱演習『京童』 指導：安東伸元

入場料 会員 一五 円

一般 二〇 円

学 生 一五 円

小学生以下無料

お問い合わせ A&Hホール

六六八七三二六七

編集後記

大和座は安東先生をはじめ、殆どの者が教育に携わっています。若手にとつて「教える」という事は次に進むための試練でもあります。教えるという事は、「自分もできるようになった」という事ではなく、これからまだまだ学んで更に向上していく決心をするという事だと思えます。だから更に勉強をし、自分を鍛えなければなりません。ここを勘違いしてしまうと、「教える」という事が自分の成長を止めてしまう落とし穴になってしまいます。このような理由から教える事が最大の勉強だということができます。若手が教える立場に立つたならば自分自身を高めていける訓練の場を与えられたと理解し、もう一度自分の考えや目指すところを見直す必要があります。そして、そのような場を与えられたことに感謝しなければなりません。蝶六さんの原稿を読んで反省をしつつ、もう一度決心を新たにしました。

さて、早いもので2008年も上半期が終わります。安東先生と一緒にハワイ遠征公演に行っていた金久と原も無事に帰国しました。新たな出会いと刺激があり、よい勉強になったようです。これからもう新たな出会いの中で成長していく大和座をどうぞよろしくお願い致します。 秀

発行日：二〇〇八年八月一日

編 者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五五五-〇八四二

吹田市千里山東二丁目三の三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza/>
e-mail: NQC57616@nifty.com